

平成30年度 校内研修（究）計画書

十和田市立三本木小学校

1 学校の教育課題

(1) 教育課題

本校の近くには、市の開祖とも言うべき新渡戸家三代を祀る太素塚があり、また、本校には新渡戸傳翁の肖像画、新渡戸稲造博士の銅像、そして二宮尊徳少年の石像もある。

こうした偉大な先人が残した学びの教えは校歌にも詠まれており、その校歌の精神を総括的に捉えると「自立」「感謝」「進取」の精神と言える。

「よりよく生きる力」を育むには、その校歌の精神を体し、以下の点を学校の教育課題として捉え指導にあたりたい。

- ① 子ども一人一人に、将来にわたって自己を開拓し自己実現を追求する能力と社会に貢献できる資質の基礎を育む自立（国の柱となりぬべし）
- ② 先人の努力に対する畏敬の念、及び共に学び共に支えあって生きている隣人への思いやりと感謝の心を育む感謝（恩をばいかで忘るべき）
- ③ 将来への夢や希望をもち、その達成に向けて自己を高めるための自己教育力を育む進取（学びの道を進まばや）

【豊かな心の育成に関して】

- 他人を思いやる心、郷土を愛する心の育成
- 校訓「自立・感謝・進取」の精神の浸透
- 基本的生活習慣の定着と自己指導能力の育成

(2) 教育目標・努力目標

校訓：自立・感謝・進取

教育目標	努力目標
◎自ら学ぶ子（知）	・めあてをもって進んで学習する
◎思いやる子（徳）	・相手の立場や気持ちを考えて行動する
◎たくましい子（体）	・健康で明るく元気に運動する
◎ねばり強い子（意）	・協力し合って最後まで活動する

2 本年度の研究計画

(1) 研究主題

よりよく生きる力を育む授業づくり

～自己の生き方について考えを深める道徳授業の工夫を通して～

「よりよく生きる力」とは、

自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きる力であり、直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できる力と捉える。

「自己の生き方について考えを深める道徳授業」とは、

道徳的価値についての表面的な理解に留まらず、これまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせて自己を見つめたり、他者の多様な感じ方や考え方に接することで物事を多面的・多角的に考えたりしながら、道徳的価値と自己の生き方についての考えを深めていくことのできる授業と捉える。

(2) 主題設定の理由

①学習指導要領との関連から

(「第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」)

第1 総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

平成29年3月31日に、小学校学習指導要領の全面改正が行われ、「特別の教科 道徳」が完全実施となった。科学技術の発展や社会・経済の変化が大きく、グローバル化が進展する世界で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが重要な課題である。こうした課題に対応していくためには、社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要であり、こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育は大きな役割を果たす。

②児童の実態、学校や地域の課題との関連から

本校は十和田の中心に位置し、創立145年の伝統ある学校である。そのため、地域、保護者の教育に対する意識も高く、協力的な保護者が多い。一方、様々な家庭環境の児童も在籍し、家庭教育力が二極化されている面もある。また、特別支援教育が充実しており、普通学級の児童も特別支援在籍の児童も一緒に協働して生活している。

学校教育評価アンケートの結果を見ると、良い点として①相手のことを思いやり、友達と仲よく助け合って働く。②周りの人に感謝の気持ちをもつことができる。③働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと。が挙げられる。課題としては、①約束やきまり、時間を守ることができない。②あいさつや礼儀、整理整頓がよくない。という点が挙げられる。

保護者の願いとしては、①周りの人にやさしくできる子。②途中であきらめず、最後までやりとげられる子。③礼儀正しく行動できる子。④どんなことにでもチャレンジしてみる子。というように、「徳」に関する願いが多い。

また、「知」に関して、「自分の考えをもち、みんなに分かるように話すことができる」の項目が、児童、保護者、教師の三者とも評価が低く、身につけさせたい力としての希望が多い。

③これまでの研究の成果と課題から

昨年度まで15年間、国語科や算数科を中心とした研究を続けてきた。その中で、自力解決を大切にすることで基礎・基本を確実に習得させることや算数アイテムを用いて考えを伝え合うことで確かな学力が育まれることを明らかにしてきた。

今年度は、教科化ということもあって職員からの要望の多かった道徳をパイロット教科とする。そして、テーマも新たに授業において考えを伝え合うことを意識して研究に取り組む。

(3) 研究目標

児童のよりよく生きる力を育むためには、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める授業を行うことが有効であることを、実践を通して明らかにする。

自己を見つめるとは、道徳的価値を自分のこととして感じたり考えたりすること。これまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めること。

物事を多面的・多角的に考えるとは、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり、協働したりしながら考えることで、多様な感じ方や考え方に接することができるようにし考えること。

自己の生き方について考えを深めるとは、児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止めたり、他者の多様な感じ方や考え方に触れることで身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめたりすること。それとともに、これからの生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めること。

(4) 研究仮説

道徳の授業において、発問の仕方を工夫し対話させることによって、児童は自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めていくことができるであろう。

(5) 仮説の検証に向けて

ア 研究内容

【発問の仕方の工夫について】

○児童に深く考えさせる発問

・発問にも種類があることを知り、発達段階に応じてふさわしい発問の仕方を探る。

<p>①「共感的発問」 「登場人物はどんな気持ちでしょうか」などのように、登場人物の心情を問う発問。</p>	<p>③投影的発問 「あなたならどうしますか、どう感じますか」などのように、「あなたなら」と問われることで、自分事として考えさせる発問。人の気持ちや立場を想像したり、考えたりすることに困難さをもつ児童が考えやすくなる。</p>
<p>②「分析的発問」 「～したのは、どのような考えからでしょうか」などのように、行為の理由を問う発問。</p>	<p>④「批判的発問」 「登場人物の～したことをどう思いますか」などのように、よいとか悪いとか、また、どの程度よいのかとか、その理由とともに考えさせる発問。判断とその理由を大切に授業になる。</p>

「内側発問」

読み物教材の登場人物の立場になって考える。

「外側発問」

人物を対象化して（自分とは違う、自分とは距離があるものとして）試行するので「外側発問」

①～④は、全て教材に即して考えるので、「教材内発問」

「教材外発問」

⑤「価値発問」「主題発問」

「親切ってどんなことを大切にしたらよいのでしょうか」のように、道徳的価値の解釈、定義などを児童自らが行う発問。これは、展開後半に使われることが多く、教材の場面や状況から離れてねらいや内容項目について直接考える。

⑥「価値問発問」

「礼儀と思いやりにはどんな関係があるのでしょうか」のように道徳的価値同士の関係を考える発問

⑦「振り返り発問」

「今日学んだことから考える、これまでのあなたのよさやこれからの課題は何ですか」などを問う。展開後半にまとめて行うことが多い。

○「問い返し」 児童の反応に問い返し、一層、思考を深める。

①「ちがいに着目させる問い返し」

児童の発言をいくつかの種類に分類した後、「どれが〇〇ですか」と再試行させる。〇〇には、善悪、実現可能性、納得度などが入る。

②「共通点の問い返し」

③「条件を変える問い返し」

人の立場（相手の立場から考えたらよいですか）や空間（学校以外でも通用するでしょうか）、時間（いつでもダメだと言えますか）、条件（もしも〇〇ならどうですか）などを変えて考えさせる。

④「あえて疑う問い返し」

分かりきったこと、自明のことだとされていることを「あえて疑う（そもそも主人公がしたことは正しいのか）」

【評価の仕方の工夫について】

①評価の役割・・・評価は、子ども一人一人のよさを認め、道徳性に係る成長を促すために行う。

- ・児童が自分を振り返り、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものとする。
- ・子どもの心（の変化）を把握する手立てとし、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むのに役立つ。

②評価の時期

○授業時間における評価

- ・導入・・・本時の道徳的価値を印象づけるとともに、自分の現在・過去を見つめる。
- ・終末・・・心の変容や自分の未来を見つめる。

○長期的な視点の評価

一定の時間的なまとまりの中で、子どもの成長を積極的に受け止めて励ますような大きくくりの個人内評価を行う。

③評価の方法

- ・道徳ノートやワークシートにおける記述から評価する方法。
- ・質問紙法・・・たずねたい事項を質問紙に事前に記しておき、その回答から分析する。
- ・観察法・・・観点を決めて、子どもの言動や表情等を観察して記録する方法。

- ・ポートフォリオ評価・・・子どもの学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積して成長のプロセスを評価する方法
- ・エピソード評価・・・子どもが道徳性を発達させていく過程において、発言や記述したものをエピソード（挿話）のかたちで集積して評価する方法
- ・パフォーマンス評価・・・レポートや展示物といった完成作品（プロダクト）、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決といった実演の過程を通じて学習状況や成長の様子を評価する方法

④今年度は、ワークシートの工夫を主とする。

- ・授業では、ワークシートを活用し、使用したワークシートは、道徳ファイルに集積する。
- ・ワークシートには、質問紙欄と自由記述欄を設ける。

【質問紙】 授業の終末に、自己評価として用いる。「真剣に考えられたか」「友達の考えを聞いて考えが変わったか」「自分の振り返りはできたか」など。

【自由記述】 その日の授業のねらいを踏まえて、「今までの自分はどうだったか」「今日の学習で学んだことは何か」「これからの自分に生かすことは何か」など、ねらいと関わってどのようなことに気付き考えたかという個人内の変化が記述されると良い。

⑤評価の活用

- ・子ども同士で交換して読み合う活動で相互評価する。
- ・個人面談の際に保護者に見せたり、家に持って帰らせて保護者からコメントをもらったりすることで子どもの心の成長を共有できる。

イ 検証の方法

【長期の検証】

- ①道徳性に関わる意識調査（5月時と12月時との比較）
- ②学校評価児童・保護者アンケートによる検証。目標値：「徳」「意」90%以上
- ③先生方へのアンケート

【短期の検証】

- ④活動の様子，ワークシートなど

(6) 研究日程

No	月 日	内 容	方法	教科領域	要請指導主事等
1	4月11日(水)	共通理解① ・昨年度までの研究 ・今年度の研究主題，目標，仮説，重点 取組等研究の実際についての確認①	全体協議	道徳	

2	5月9日(水)	共通理解② ・今年度の研究主題, 目標, 仮説, 重点 取組等研究の実際についての確認② ・指導案の形式提案, 確認。 ・研修(究)計画についての確認	全体 協議	道徳	
3	6月13日(水)	公開授業 特別支援教育部	全体 協議	全領 域	
4	6月27日(水)	検証授業(1)第6学年	全体 協議	道徳	
5	8月20日(月)	(一般研修)	全体 協議		
6	9月12日(水)	公開授業(2)第2学年	全体 協議	道徳	
7	9月19日(水)	検証授業(3)第3学年	全体 協議	道徳	
8	10月3日(水)	検証授業(4)第5学年	全体 協議	道徳	十和田市立高清水小学校 校長先生
	10月10日(水)	(学習指導研)	全員		
9	10月17日(水)	検証授業(5)第1学年	全体 協議	道徳	
10	11月21日(水)	検証授業(6)第4学年	全体 協議	道徳	十和田市教育委員会 指導主事
11	11月28日(水)	・今年度の研究の成果と課題の確認 ・「研究のまとめ」作成について	全体 協議	道徳	
12	1月10日(木)	(一般研修)			
13	1月23日(水)	・出された成果と課題の確認 ・課題から見出される次年度の方向性	全体 協議	道徳	
14	1月30日(水)	・次年度の研究についての確認	全体 協議	道徳	

3 研修計画

(1) 研修の重点

- ・道徳に関わる基礎研究を推進する。

(2) 研修日程

No	月 日	内 容	方法	教科 領域	講師等
5	8月20日(月)	道徳基礎研究Ⅰ	全体	道徳	
12	1月10日(木)	道徳基礎研究Ⅱ	全体	道徳	

本主題での研究1年目		研究教科等	道徳科
研修主任		研究指定の有無	無